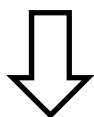


企業の利益、給与に回らず 配当金・内部留保に回る

1961年～89年は高度成長期

企業の利益は社員の給与や設備投資に回りさらなる消費や投資に結び付く好循環だった。

- 企業の純利益は21倍
- 人件費は37倍
- 設備投資(ソフトウェア除く)は17倍



平成に入って好循環は崩れる

- 理由
- 90年代に金融危機
 - リーマンショック

2回の危機が経営者の心理を冷やした。特に世界との競争が激しい製造業はだぶつく社員を抱える余裕はなくなった。非正規社員が増え、景気の調整弁になってきた。

所得格差が広がる

銀行が貸し出しを渋り、企業は資金繰りに苦労した。トヨタ自動車のような優良企業でさえも倒産の二文字がよぎったことがあった。

各企業は設備投資はじめ社員の昇給を押さえ、自由に使える資金をため込むようになった。

銀行の貸し渋りにより企業は市場から資金調達をする方向に舵をきり、株主重視の流れが強まった(配当金の増加)

2016年度の国内企業全体の配当額は10年前から24%増の20兆円

